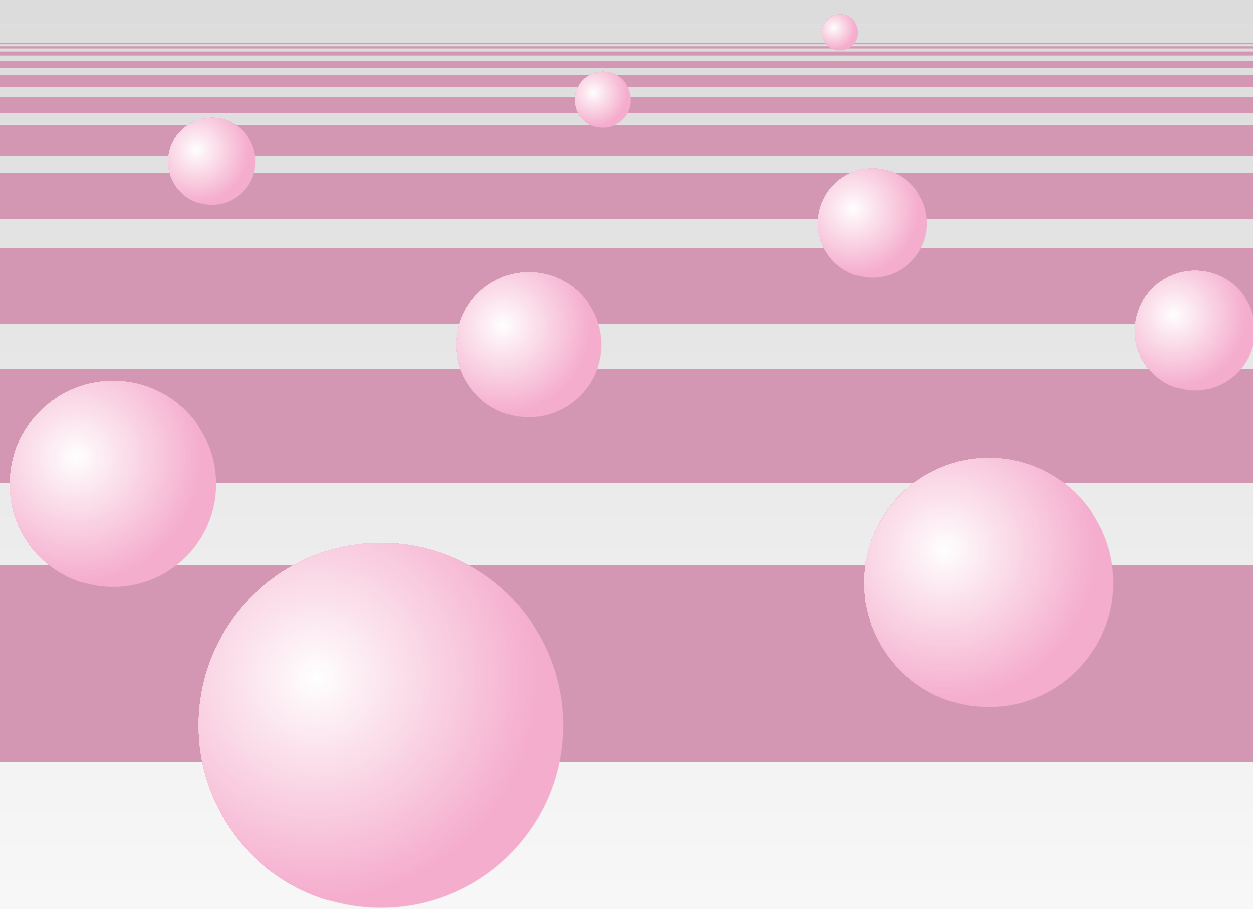


第18回

心に残る医療

私の体験記コンクール 入選作品集



主催：日本医師会 / 読売新聞社

後援：厚生省

協賛：アメリカンファミリー生命保険会社

協力：暮らしの手帖社

表彰式の模様..... 1 ~ 7

入賞作品紹介

厚生大臣賞..... 8、9

日本医師会賞.....非掲載

読売新聞社賞.....12、13

アメリカンファミリー賞.....14、15

介護特別賞.....16、17

佳作.....18~27

読売新聞記事

主な募集告知.....28

表彰式の模様.....29

入賞者発表.....30~31

入賞者・上位5編発表.....32~33

コンクールの結果.....34

審査委員一覧.....35

応募作品内訳.....36



ポスター

入賞に輝いた皆さん



審査委員・評論家
上坂 冬子 様
審査委員・評論家
水野 肇 様
審査委員・
日本精神病院協会名誉会長
齋藤 茂太 様
佳作
寺川 文香 様
佳作
伊勢 夏美 様
佳作
布田 美希 様
佳作
長谷川 美津子 様
佳作
志村 綾子 様
佳作
田淵 泰子 様
日本医師会常任理事
山田 統正
読売新聞社事業局長
矢後 勝洋

日本医師会副会長
石川 高明
アメリカンファミリー生命保険会社社長
大竹 美喜 様
厚生省・大臣官房審議官
辻 哲夫 様
介護特別賞
今田 みゆき 様
日本医師会賞
匿名 様
厚生大臣賞
仙度 知子 様
読売新聞社賞
南城 愛 様
アメリカンファミリー賞
山路 靖子 様
日本医師会長
坪井 栄孝
読売新聞社専務取締役
堀川 吉則
日本医師会副会長
小泉 明

主催者挨拶

日本医師会長
坪井 栄孝



「心に残る医療」私の体験記コンクールの主催者を代表して、一言ご挨拶を申し上げます。

このコンクールもおかげさまで第十八回を数え、今回も二、二八七編という多数のご応募をいただきました。その中から佳作を含め十五編の作品が選ばれ、本日の表彰式の運びとなりました。

ご参列の受賞者の皆様には、心からお祝い申し上げますとともに、本コンクールにご参加くださった方々、ご協力いただいた方々にも厚く御礼申し上げます。

今回の受賞作品は、医療部門においては、闘病中のわが子と看護婦たちとの交換日記を通してふれた医療現場の人々の優しさと思いやり、父親の失明の危機にかけられた医師の言葉に感銘して医学の

道に進むことを決意する高校生、難病におかされた母の誕生日に贈られた誕生ケーキとオルゴールのエピソード、二十年にわたるかかりつけ医との交流の記録 など、患者さんを思いやり、心やさしく接することの大切さを、改めて気付かせてくれるすばらしい作品ばかりでした。

また、祖父の介護に苦悶するなかで、近所の開業医、ヘルパーの助けを借りながら、介護のあり方を学んでいく など、自宅での介護の生々しい現実を伝えてくれる作品が介護部門には多く、在宅介護における家族と医療関係者との連携が今後ますます重要となってくることを感じさせられました。

昨今の医療界に対する過熱気味のマスコミ報道は、患者さんと医師との信頼関係にまで水をさす結果になりかねません。日本医師会では、現在、患者さんへの診療情報の提供を積極的に行い、できるだけ患者さんの意に添えるような医療を目指して地道に努力をしております。将来的には、かならずや、皆さまに十分満足していただけるものとなることを確信しております。

患者さんと医師との信頼関係は、温かい心の交流なくしては築けないことが、今回受賞されました方々の作品を通して、強く感じられました。これらの作品の持つ意味を十分に認識し、患者さんやその家族の視点に立った医療を実践していくことをお誓いし、ご挨拶とさせていただきます。

表彰式

主催者挨拶

読売新聞社専務取締役

堀川 吉則



受賞者の皆様方に心からお祝いを申し上げます。皆様の作品は、二千二百点以上という大変多くの応募の中から、厳しい審査の結果、選ばれたわけでございます。

今日の読売新聞の二十八面、二十九面に、二ページにわたって厚生大臣賞、日本医師会賞、読売新聞社賞、アメリカンファミリー賞、介護特別賞の五つの作品が掲載されておりますことは、皆様ご存じだと思います。いずれも、ご自分もしくは家族の闘病、介護のことが、実際の体験に基づいて書かれており、大変感動的な作品ばかりでございます。

言つまでもないことですが、一生を終えるまでに、お医者さん、看護婦さんの世話にならない方はまず皆無だと思えます。そういう

医療、介護の場を通じて、患者とお医者さん、看護婦さんなどの心の触れ合いがあり、それがまた医療の原点であろうかと思えます。

国は、今年四月からようやく、介護制度を発足させますが、このコンクールでは、四年前から既に介護特別賞という賞を設け、介護体験された方の生の声を、紙面を通じて読者の皆様に広く伝えてまいりました。このコンクールが今後とも二十一世紀の医療、介護環境の整備等々に役立つのであれば、主催者の一人として大変うれしいことでございます。

ご承知のように、読売新聞社では、このコンクールのほかに、山間僻地で医療に従事されているお医者さんや看護婦さんを表彰する医療功労賞という事業も行っております。また毎日の紙面でも、「医療」について読者の皆様方にあるんな情報を伝えているところでございます。このような医療、介護の企画、情報などを今後ますます充実していきたいと思っております。

最後になりましたが、作品を審査していただいた審査員の先生方、共同主催の日本医師会、ご後援いただきました厚生省、ご協賛をいただきましたアメリカンファミリー生命保険会社、ご協力いただきました暮しの手帖社に、厚く御礼申し上げます、私の挨拶にさせていただきます。

祝辞

厚生大臣 丹羽 雄哉
(代読) 厚生省大臣官房審議官 辻 哲夫



第十八回「心に残る医療」私の体験記コンクール表彰式に当たり、一言お祝いの言葉を述べさせていただきます。

はじめに、栄えある表彰を受けられました皆様方に心からお喜び申し上げます。今回のコンクールでは、全国から二、二八七編もの作品が寄せられ、そのうち医療をテーマにした作品が一、八八三編、介護をテーマにした作品が四〇四編であったと伺っております。改めて国民の医療や介護に対する関心の高さを痛感した次第です。

私もいくつかの作品を拝見させていただきましたが、いずれも、患者やその家族が医療施設や在宅で、力強い人間の生き様に直面され、心が動かされた、その生の声に満ちており、一つ一つの作品の持つ内容の重みに強い感銘を受けるとともに、医療や介護の大切さ、また、医療や介護の担い手と受け手の信頼関係の重みを強く印象づけられました。

今回の厚生大臣賞を受賞された、奈良県の仙度知子さんの作品は、悪性腫瘍を患い、舌の切断手術を受け、言語が不自由になった息子さんのコミュニケーションを図るために、看護婦の発案で始めた交換日記。その日記を通して、看護婦さんの優しさ、息子さんの考え方が今まで以上にはっきりと伝わってきて、看護婦さんとの心の触れ合い、息子さんとのきずながより深まったというお話です。

患者と家族、医療従事者との心の触れ合い、信頼関係が、患者の生きようという気持ちを奮い立たせ、最後まで病氣と闘う強い意志を与えるものであると痛感いたしました。

また、介護特別賞を受賞された大阪府の今田みゆきさんの作品は、祖父の介護を通して、介護の難しさを学ぶとともに、医師等の励ましや祖父からの感謝の言葉で介護のやりがいを見出したというお話です。

高齢化が進む今日、介護の重要性も高くなってきておりますので、このような介護の体験談も今後の行政にいかせていければと感じました。

私は、厚生行政を推進する立場にある者として、国民の皆様によりよい医療や介護が提供され、すべての国民が安心して生活を送ることができるよう、十分な対策を講じてまいりたいと考えております。

今後とも、このコンクールにおける体験記をはじめとして、国民の皆様方が医療や介護の現場でお感じになった声をできるだけ聞かせていただき、これを厚生行政に反映させていきたいと考えております。

最後になりましたが、このコンクールのためご尽力をいただきました日本医師会、読売新聞社、及び、アメリカンファミリー生命保険会社の皆様に対しまして、深く敬意を表しますとともに、ここにお集まりの皆様方の今後のより一層のご健勝とご活躍を祈念いたしまして、私のご挨拶といたします。

表彰式

祝 辞

アメリカンファミリー生命保険会社社長 大竹 美喜



第十八回「心に残る医療」私の体験記コンクールにおいて、「入賞されました皆様には心より、お祝い申し上げます。」

昨年を八二編上回る二二八七編もの応募作品の中から厳しい審査を経て、選ばれたわけでございます。誠にめでたくございました。今、日本の医療制度は大きな改革と転換を遂げようとしております。少子高齢化が進み、六五歳以上の高齢者の人口比は、一九八五年には人口の一〇%でしたが、九九年九月には、十六・七%となりました。今後の予測では、二〇〇六年には二〇%、二〇一五年には二五%、二〇五〇年には三二・三%に達する見込みです。三二・三%と言えば、総人口の三分の一に当たります。つまり、三人に一人が高齢者になる超高齢社会は、もう目前に迫っているのです。ピラミッド型の人口構成と右肩上がりの経済成長に支えられてきた現状の医療制度も、ここに来て、財政の面と医療提供体制の両面で、大きな改革と転換の必要に迫られているのがお分かりいただけるかと思えます。

社会保障制度の改革については、厚生省や日本医師会など、関係の皆様が「尽力されている」と言いますが、私も、今年一月に、「昨年の「医療ビッグバンのすすめ」に続いて五冊目の著書「医療ビッグバンのすすめ」を出版させていただきました。その中で、私なりの提案をさせていただきますので、皆様からのご感想やご意見を頂戴できればと存じます。先程申し

上げた、超高齢社会では、当然ながら、高齢者の方への治療や介護が、ますます日常的になってくると思われます。高齢者の方への治療や介護には、高齢者以外の方を治療・介護するのはまた違った心構え・思いやりが必要になってくるでしょう。人生の先輩として、敬意をもつて接する気持ちや医療従事者と、患者の家族の連携も今まで以上に密になっていくと思われまふ。患者・家族・医療従事者、この三者の心のふれあい、信頼関係がこれまでより、さらなる重要なようになってくるのが、二一世紀の医療なのではないでしょうか。

「医療技術だけでは、医療は成り立たない。皆様の心温まる体験記に接する時、私は、まさにこの言葉を実感します。超高齢社会の中で、財源など、構造的な問題だけでなく、それと同じくらい、いや、それ以上に重要になってくると思われる、医療従事者と患者、そして、その家族との新しい「ミニマリー」の形を、私は皆様とともに、今後とも模索していきたいと思えます。

今回、アメリカンファミリー賞を受賞された北海道の山路靖子さんの体験記もまた、患者と主治医の「ミニマリー」がいかに大事なものを、教えてくれます。ご自身ご家族と、近所の医師とのふれあいをとりあげられたものですが、何よりも、医師への「信頼感」が、全文を通して、私どもに強く訴えてまいります。私も、深く感動いたしました。

私もアメリカンファミリー生命保険会社が、「心に残る医療」に協賛させていただくようになって、今年で、八回目をむかえることとなりました。民間の保険会社である当社といたしましても、このような意義ある企画に協賛させていただくことは、大きな喜びです。当社は、先程申し上げました患者・家族・医療従事者の三者のふれあい、信頼関係を築くお手伝いを積極的に行っております。その一つと致しまして、厚生省と「一緒に、長期治療が必要な子供たち」を介護する「家族のための総合施設」、AFLAC「アレックスハウス」を十一月の完成を目指して建設中です。

これは「家族の宿泊施設のほか、研修室や、皆さんが「一緒にくつろげるダイニングルームなども持つ、日本で初めての、総合的な施設です。この、AFLAC「アレックスハウス」が、患者・家族、そして医療従事者の方々のふれあい、信頼関係をより強くする場になることを心から願っております。

最後になりましたが、本コンクールを主催された日本医師会様、読売新聞社様、また審査員を務められました先生方をはじめ、関係者の皆様のご協力のもと、この企画が、どうも将来に渡ります、ますます盛んとなり、そして、一人でも多くの国民の皆様にご大きな感動を与えて下さることをお祈り申し上げます。私の祝辞とさせていただきます。

入賞者の皆様、本日は誠にありがとうございました。

審査講評

審査委員・医事評論家 水野 肇



まず何よりも受賞者の皆さんに、おめでとう申し上げますということをお申し上げたいと思います。

講評と言われても、私は人を講評するほどの能力はありませんので感想の一端を述べさせていただきますと思います。

私は実は第一回目から審査をやらせていただいたておりますが、一番感心しますことは、毎年、よく二十人以上の応募があるなどということではないです。私もこの二回の商売をしておりますので、ほかにも審査委員をやっていますけれども、大抵は一回目は応募があるが、二回目か三回目が落ちると、その後は誰もまた落ちていくということが私の感想でございます。

ところが、この講評新聞と医師会をおやりになつておられます。心に残る医療、私の体験記コンクールは、一回目から間違いなくレベルは上がつていき、また、毎年二十人以上の人が応募してあるということでございます。

これはなぜかなとちょっと考えてみたのですが、一つは私の体験記とこのコンクールがみそだと思つたんです。いくつかの賞と私ののは大体どちからかという、作文に近いものです。それに対し、これは私の体験記ですから、自分が体験してないことを体験したような顔をして書いてもすぐわかるわけです。結局、自分が体験したことだから書きやすい、一番迫力があるわけでございます。

それから、講評新聞がやつていられるということも威力があるということを、

毎回感じるわけです。

また、日本医師会が主催しているということも大きな理由だと思えます。医者と患者は平等だとしても、医者の前に行つたら、病気を治してもらおうと思つたら、みんなやっぱりどうしても弱いわけです。実際、医師会が怖いから別ですが、そういうところからすると共催をしてきたというところに、ちやうど僕は心ほのほのとするものがあるんじゃないかと思えます。

随分前に、イギリスに行つた時、当時のイギリスの医師会専務理事のフナイブソンという人が、私がやっている仕事の中で一番うれしいのは、うちの出版局で出したものがベストセラーになつていることだと言っていました。一人の患者を治したということも立派なことかもしれないけれども、医師会が出した『結婚の手引』という本は四百五十万部出てるわけです。全世界にお医者さんはいくらもいることをやるようになってきました。日本医師会はこれを十八年前からおやりになつており、私は着眼点として非常に良かったのではないかと思つております。

今年も二二・二七点の応募がありまして、今表彰された方が審査の結果選ばれたわけでございます。みんな非常に着眼点もいいし、それから、体験したことのポイントのつかまえ方も非常にうまくなつております。これは、ある意味においては戦後教育のしからしむるといふかなと思つてます。

もう一つの審査を通じて感じましたことは、やはり読書く才能があるということなんです。本当に読書がうまくなりました。

ただ、一つだけ、最後に耳障りなことを言わせて下さい。それは漢字を知らないということなんです。これはよく齋藤先生がおっしゃることをすけれども、物を書くという時には、左手には小さな用字用語辞典でいいから持って書くようにしてください。この受賞を機に、すでにお持ちかもしれませんが、用字用語辞典を一冊お持ちいただけて、今後お書きになる時には、誤字脱字がないようにお書きいただければ、ほんとに満点に近いものが書けるようになるのではないかと思います。

具体的には言いませんが、入賞された方の中にも、これが大学の国語の入学試験なら落ちたかと思つたような方がありました。このコンクールは国語力を問うわけではありませんが、構わないといえは構わないので、私が私ではどうせお書きになるなら、間違いない字で書いていただきたい。それは物書きの端くれとして非常に思つたことでございます。

いずれにしても、文章力自体は年々この上上がつてきているのではないだろうか、というのが私の全体的な感想でございます。

皆さん、本誌におめでとうございました。

表彰式と記念パーティー



受賞者を囲み懇談・パーティーの様子 帝国ホテル 孔雀・南の間



表彰式・帝国ホテル 牡丹の間



審査委員・日本精神院協会
名誉会長齋藤茂太氏による乾杯



表彰式会場での受賞者のみなさん



司会の須磨佳津江さんからインタビュー
を受ける読売新聞社賞受賞の南城愛さん



審査委員・評論家の上坂冬子氏から賞状
を受け取る介護特別賞の今田みゆきさん

年齢は平成12年4月1日現在のものです。

厚生大臣賞

(賞状・表彰楯及び賞金50万円)

「愛の交換日記」



仙度 知子

(67歳)

奈良県橿原市・無職

もう十五年も前のことになります。当時二十七歳の息子は結婚を間近にひかえており、仕事にも私生活にも充実した日々をおくっていました。ただ、口中の腫れがひかないことだけがわずかな気掛かりでした。その治療に近所の病院に通っていたのですが、やがてリンパ腺せんまでも腫れ出し、単なる口内炎ではないのは明らかとなり、〇病院耳鼻科での検査を指示されま

した。

検査後、私と主人は担当医に呼び出され、結果を告げられました。それは「悪性の腫瘍」の宣告だったのです。

その一言でパニック状態に陥った私の耳に、手術の説明、コバルト照射、舌の切断、社会復帰と生存率……など非日常的な用語が次々と飛び込んできました。が、あまりのことに気持ちの整理や判断ができず、「お願いします」と言っただけが精一杯でその場を退出しました。

こうして本人への告知はないまま入院となりました。三十回予定のコバルト照射は十五回で打ち切りとなり、手術が決まり、その具体的内容(舌切断・リンパ腺切除・胸筋を切り舌につなぐ)を聞いた時、息子の顔は青ざめていました。だんだんと手術決行の日はせまり、息子の不安はつのるばかりです。二日前のことでした。廊下ですれちがった若い看護婦さんに「話せなくなるなア」とこぼしたのです。するとすかさず彼女は「そつしたら交換日記をしましょう」と

答えて下さったのです。

早速ノートが用意され、手術の前日、「愛の交換日記」と表紙に書かれたものが病室に届けられました。

ページをめくると、婦長さんの、「今夜はゆっくり休んで下さい。花の十二号病舎スタッフ一同がついています。頑張ってください」をはじめ十三人もの看護婦さんの励ましの言葉が並んでいました。私は思わず熱いものがこみあげ、涙でいっぱいになっていました。息子も冗談のつもりが現実的な形となったことに喜び、何度も繰り返し読んで自分もお礼と明日の手術を受ける心構えを書きました。

こうして日記を通して息子と看護婦さんたち、また私たちとの心の交流が始まりました。

この後、深夜の勤務を終えた朝方、また皆が寝静まる深夜、それぞれの方が熱心に書いて下さいました。

「言いたいことは、何でも言いなさい」「痛い時や、しんどい時は、遠慮しな

いでネ」

まるで息子の心の中が見えているようでした。

術後五日目、息子は三つのポートパツクを手に持ち、点滴を引っ張り、管のからんでいる体で看護婦室に行き、腫れて大きくなった顔で腕と指を伸ばして「Vサイン」を作りました。言語が不自由になつた彼の精一杯のお礼のつもりだったのです。

「こんなことを書いた人もいました。言葉があつても人の心が通じ合うのは難しいと思います。でも言葉がなくとも敏感に人の心を感じることが出来る時もありますね。言葉のしゃべれない人が多い十一号病舎に勤務して発見した一つです」

私も病室へ行くと、まず日記に目を通して、その間の様子ややり取りを知ることが楽しみになっていました。私もまた、息子との「会話」を楽しみ、久しぶりに母子の絆がよみがえってきたようでもありました。

おかげで回復も順調で、あれほど心配した話すことも案外早くでき、息子の声を再び耳にした時は、うれしくてうれしくて涙が堰を切つたようにあふれ出ました。主人も日記にお礼を書き、それから私たちは心配事やお願ひなどを書き続け、ノートはだんだんと膨らんでいきました。

ところが、口からの食事ができるという予定日の前日、顎の下が化膿し、高熱が出たのです。一番恐れていた「転移」が起きていたのでした。

結局、闘病期間は五カ月間で終了しました。それは壮絶な闘いの日々でした。最後は気管閉そくによる脳死となりました。しかし、最後の最後まで生きることがあきらめず、頑張り通し、静かな気持ちで迫りくる「死」を意識できたのはこの日記のおかげだと思っています。

最後のページに息子は「ありがとう」と書き、日記を閉じました。残された『愛の交換日記』、これは私たち家族にとって唯一無比の宝物となつてしまいました

た。

それから七年後、夫も肺がんでN医大に入院し、やさしく看護されて世界しました。

さらに私自身も現在、同じ病院の世話になっていきます。激務である医療現場にありながらも、常に「やさしさ」を失わない人々に感謝の思いでいっぱいです。そして、この日記はそれを実証するものだ、と思っております。



インタビューに答える仙度さん(右)

読売新聞社賞

(賞状・表彰楯及び賞金50万円)

「夢と涙の ハッピーバースデー」



南城 愛

(15歳)

奈良市雑司町・中学生

「あと五日でママの誕生日だね。なんとか誕生日まで……」

父は目を真っ赤にして、病室のベッドに横たわる母の両足をマッサージしながら、私と妹に言いました。くまのプーさんの人形を抱きながら、妹はそっと母の頬に手の平を当て、「がんばってママ」と、やさやいていきます。

母はもう朝からほとんど呼吸が無く、

父や母のお姉さんが、母の指に付けた酸素測量機を見ながら、五分ごとに人工呼吸をくり返しています。母の頭には妹が一人で一生懸命作った水色とピンク色のお守り帽子がかぶせられ、みんなの祈りがいっぱいにつまった魔法の帽子のよう。フランス人形のような愛らしい母の寝顔は、今にも、「あら、ママよく眠ったわね」と言いながら起きだしそうです。母が突然倒れたのは二年前の秋。朝食の準備中に急に体のバランスを保てなくなり、父に寄り掛かって「ママどうしちやったのかしら」と言っただまま崩れるように倒れました。

その日のうちに緊急入院。そして、父に悪夢の病名が告げられました。見る見るうちに父の顔色が真っ青になっていったのを覚えています。翌日の手術。はつきりとした病名も知らされず、私と妹は病院のそばにアパートを借りて看病する父とも離れて、親せきの叔母さまと共に生活することになりました。

「ゆっちゃんをお願いだよ」と言っ

た。言葉に、私は体重が無くなったような宙に浮いたような気分になりました。不安で泣いている妹に「ママは大丈夫だから、安心して」と、言っのが精一杯でした。

やがて長い三か月が過ぎ、母が退院し自宅で療養するようになって、家族四人で生活できる喜びを取り戻した日、私は母にしがみついて泣きました。母は私の頭をなで、「こめんなさいね。もう二度と離れない、ママは必ずそばにいるからね」と言ってくれました。

あの日から二年。一時母の回復は目覚ましく、私たち家族は再び希望に包まれました。桜の花見やお伊勢さま参り、そして、母の金沢へのお里帰り。父は薬を調節して母に飲ませたり、毎日の食事の準備などで大忙しでしたが、日に日に元気を取り戻していく母に大喜び。母は一人でお買い物に行けるようになって、そのつど私と妹にお洋服や本などのプレゼントを準備して待っていてくれました。

シユークリームのように甘くて優しい母が帰ってきた。宝石のように輝いた母との日々。

でも、再び母を襲った病魔があっけなく私たちの幸せを奪っていききました。日に日に遠ざかる意識のなかで、母は私と妹に「ごめんね。愛ちゃん。優ちゃん」と言ったのを最後に、とうとう呼吸困難となって、緊急入院してしまいました。

その日初めて、父は私たちに真実を語ってくれました。母は二十万人に一人の難病のグリオブラストーマで、今日まで奇跡的ながんばりを見せてくれたこと。そして、入院させないで子供たちと一緒に居させてほしいという母の強い願いがあったこと。そんな母の意志を尊重し、見守り続けて下さった主治医のH先生がおられたことなど……。

父は三十九歳という若さの母を思い、あと五日にせまった誕生日をなんとか迎えさせてあげたかったのです。二か月間病室に泊まり込み、ほとんど眠らずに母を看病してきた父。せめて、父の祈りを

かなえてほしい。私はそう願いました。

そんな父のそばに、H先生が静かに寄り添っていて下さいました。そして、二つの包みを差し出されました。父が箱を開けると、一つは母の名でお誕生日おめでとうと書かれたハースデーケーキ。もう一つはオルゴールの木箱でした。

「子供たちに楽譜作りを手伝わせてたので、うまく音が出るかどうか……」。そう言いながら、オルゴールを回された途端、今まで聴いたことの無いような澄みきった美しい音色で、「ハッピーバースデー・トゥー・ユー」が流れてきました。一瞬時間が止まったような、夢の中に入ったような気がしました。父もH先生も母のお姉さんも、そして、私も妹も無言でした。いつの間にか父の目にはいつぱいの涙があふれ、ポロポロとこぼれ落ちていました。

「お父さんのことをしっかり励ましてあげてね。お願いだよ」とH先生が私にそっと耳打ちし、静かに病室を出て行きました。母の誕生日を心待ちにしてい

た父の気持ちをだれよりもわかっていた下さったのは、H先生だったのかもしれない。

母の思い出し、父の思い出しがいつばいに詰まったオルゴールを聴くたびに、亡くなる三時間前にささやかな誕生日祝いができた夢の一時を思い出し、私は今でも胸が熱くなります。



読売新聞社・堀川専務取締役から賞状を受け取る南城さん（左）

アメリカンファミリー賞

(賞状・表彰楯及び賞金50万円)

「私より先に逝ったら
あかんのに」



山路 靖子

(56歳)

北海道豊富町・主婦

引越してまもなく、全く不案内、発熱した息子を抱え、病院はどこだと車を走らせていた。住宅街の一角の小さな医院に飛びこんだ。大柄でかくしゃくとして、元軍人のような、怖い顔のお医者さんだ。が、目の前のいすに座らせ膝ひざで抱えるようにして「熱があるのか、しんどいか」と小学生の息子にかけてくれた声はやさしかった。「外で遊び過ぎた

のか。そうか。注射はいやか、そうか。そしたら薬をあげるからそれを飲んで今日だけ家の中に居よう」と、聴診器を当てている。そして「すぐ治るからな」と、机の引き出しからキャンディー二個を取り出し、息子の手に握らせた。こぎげんを取るでなく自然な、心からの子とも好きという態度だ。息子にはそれがすぐわかったらしく、風邪をひくと、あのセンサーのここへ連れてってと言つようになつた。息子だけでなく、私と夫も何かあると通うようになった。小さな医院なのにスタッフ人数が多いな、みんなだれに対しても同じ態度だなと感じた。そして一年ほどたった時、何げなく医院の看板を見た。外科、と書いてあるではないか。そういえばいつも待合室には包帯を巻いた人がたくさんいたな、と、息子を医院に連れて行く役目の夫が言う。夫らしいなと私は笑ってしまった。その後何日かしてよく見ると小さく呼吸器科、消化器科、泌尿器科なども書いてあり、風邪でこの医院へ来てよかったのだ、と私は苦

笑いした。何でもええ、ぼく、あのセンサー好きやと息子が言った。どこか大きな病院の外科部長だったこと、内部の権力争いがいやで自分で開業したということ、いつだれに聞いたか、そのことが真実かどうかわからないが、耳にした。そんなことどうでもいい、自分たちの目で信頼したお医者さんじゃないかと夫は言った。

夫が職場での健康診断書を持って、精密検査を相談すると「あんたもうトシなんだからどこも悪くないという方がおかしいぜ。このくらいの数値なら油ものを控えた食事で暮らしたら、薬などいらん」とY医師は言う。一か月ほどして尿検査や血液検査をしてくれた。数値は少しよくなっていた。夫のいびきがあまりにもきついたので、「なんとかならんか」と私が相談すると、「そんなん眠っている時まで責任がもてるかい、なァ」とY医師は夫に向かって言う。夫はうれしそうに笑っていた。

Y医師との会話は私を安心させ、帰り

にはもう軽快な気分になる。会話だけじゃない、訴える症状を聞きのがすことはない、時にはレントゲン撮影やCTまで駆使して即、調べてくれる。そして自分の所では治療不可能という判断、すぐ救急車を呼んで大きな病院への配慮を、私は何回か待合室で見た。その決断は速い。医師としての力、質の良さ、高さがしのばれ、私どもの信頼は、より深まる。

私が看護婦さんに処置を受けているそばで、次の患者の七十代の婦人がY医師の前にすわっていた。「何を息子たちに遠慮してんのや、ちゃんと仏壇のある部屋で、亭主の位はいの前で広々と寝たらええやないか、そうやってゆったりしたらええのや」とY医師は言っている。婦人は「そつどすなア」と言い、立ち上がった。笑顔になっていた。「ホントにしんどいですわ。仕事をやめて、ぐっすり寝たい」とめずらしく愚痴をこぼした夫に、「山路さん、いちばん楽に眠る方法教えたるか」とY医師はいたすらっぽく笑い、「死んでみイ、ゆっくり眠れるで

エ」と言った。「ホンマですな、まア、死ぬまでがんばりましょかいな」としやれ好きの夫も笑っていた。知人の息子さんは受験勉強のストレスで湿疹が噴き出た。受験日は一週間後だった。「受験するの、そつか。試験の日まで、気分悪かったら夜中でもいい、いつでも電話せえ」とY医師は言ったという。彼の発疹は四日後に軽減した。うわさにあるような、夜中や時間外は絶対診てくれない、ではなかったのだ。彼は無事合格した。患者としてそんなY医師とのかかわりは二十年余となった。この医者さんに着取ってもらって私は死にたいと思った。なのに、突如、Y医師が逝った。そのことは、診断書を書いてもらおうと医院を訪れた時、後始末をしていたスタッフに聞いた。私と夫はショックで途方にくれた。その一か月前、奥さんが急死したという。

Y医師よりも注射が上手と評判だったあの婦長さんが奥さんだと初めて知った。ずいぶん年の差があるよつだった。

こわもてのあのY医師に、情熱的な人生のときがあったのだ。センセイはいい人生をおくったんだ、よかつたねと、夫と私は今、語り合っている。

私の最期をみてもらう約束は果たしてもらえなかったけれど、Y医師にめぐりあったこの二十年間の安心感、幸せ、を思った。三か月前京都から、縁あって日本のいちばん北の端に、また引っ越した私たち。これからもがんばって生きたい。「ここで、もまた必ずいいお医者さんに出会える」と信じている。



アメリカンファミリー生命保険会社・大竹会長から賞状を受け取る山路さん(左)

介護特別賞

(賞状・表彰楯及び賞金50万円)

「介護が教えて

くれたこと」



今田 みゆき

(29歳)

大阪市北区・フリーター

平成十一年六月十七日、八十一歳の祖父は家族の見守る中、自宅のベッドで静かに息をひきとりました。
祖父は三年前に日課の散歩に出かけ、足を滑らせて腰の骨を折ってから自由に歩くことができなくなりました。悪いこととは重なるもので、後に脳こうそくと肝臓がんになっていることもわかり、私たち家族は大きな衝撃を受けました。

実は祖父はほかにも体に障害を抱えていました。三十年程前の交通事故で右腕を失っているのです。そんな祖父に病名を告げる事はもちろん、可能性の低い手術を受けさせる決断はどうしてもできませんでした。幸いにも痛みもなかったもので、私たちは退院後は自宅で介護するという道を選びました。残された貴重な時間を、できるだけ家族と一緒に過ごさせてあげたかったです。

私の家は母・私・弟・そして母の親である祖父母の五人家族です。私が七歳の時に父が他界してからは、母が父の後を継いで小さな建材店を切り盛りしてきました。仕事と介護の両立は想像以上に困難なものでしたが、当時弟は大学生で地方に行っていたし、祖母も心臓に持病があるので、私と母の二人が交代で面倒をみるしかありませんでした。
足が治るものと信じていた祖父に、毎日のようにリハビリとマッサージを求められ、大柄な体を抱き起こし支えて歩かせる事は、女の私たちにとって至難の業

でした。

しかし、それよりもつらかったのは排泄物の処理で、オムツをつけ始めた当初は、取り替えが下手で便をシートにつけたり、おいで嘔吐したりして慣れるまでは本当に苦労しました。

七か月が過ぎたころには、あんなに器用に使っていた左手にも障害が始め、唯一自力でしていた食事さえも私たちの手をかりるようになりました。栄養面を考慮した献立作りをはじめとして、食べさせる際には口に運ぶ量や間の取り方などにも気を遣い、病人の食生活の難しさを目の当たりにしました。

身の回りの事が何一つできなくなった祖父の介護で疲れきっていた私たちにとって、移動入浴車の存在は大きく、とても価値あるものでした。寝たきりの病人を入浴させる事は、重労働で危険性を伴う極めて困難な介護です。それを丁寧到手際よくこなすヘルパーの人たちには感心させられ、抱え方や着がえ等のコツもわかり、大変勉強になりました。

このシステムや電動式ベッドのレンタルの手配をしてくれたのは、近くで開業している個人病院の先生です。先生は床ずれ防止のマットやたんをこる装置等、介護に必要な物を無料で貸して下さいました。それだけでなく私たちの無理な相談にも応じてくれて、臨終までの期間、忙しい診療の合間を縫っては毎日のように往診に来て下さいました。祖父を勇気づけ私たちを励まし、精神面でも大きな支えとなってくれたこの先生との出会いがなかったら、自宅介護を続ける事は不可能だったと思います。家族のように接して下さった先生の事を、私たちは生涯決して忘れることはないでしょう。

祖父は点滴や薬で一進一退を繰り返していましたが、一年を過ぎたころには寝がえりもつてなくなり、言語障害も出始め、ベッドにとりつけたベルを頻繁に鳴らすようになりました。当然介護の量も増え、私たちの疲労もピークに達していましたが、死を悟った祖父が涙を流し、もつれる口で言った「ありがと」の一

言で私たちは頑張り続けることができませんでした。介護する人よりもされる人の方がずっとつらい思いをしていると気づき、最後まで疲れに負けずに、誠心誠意介護しようと決意したのです。

結局、それから半年後に祖父は亡くなりました。つらく厳しい日々でしたが、その一年半で私たちは様々な体験をし、数多くの事を学ぶことができました。生命の尊さ、人とのふれあいのすばらしさ、思いやることの大切さ、やり遂げることの苦しさを介護を通して知ることができました。

介護をする上で不可欠なものは真心と根気強さだと思います。いかなる時も病人の立場に立ち、その視点から物事を見つめ、思いやりの心を持って気長に接することが何よりも大切なのです。

介護に無縁の人や無関心な人はまだまだ大勢いるでしょうが、一人でも多くの人に介護の難しさや重要性を知ってほしい、そのすばらしさもわかってほしいと思っています。

母はあの時の経験をいかして、いつかは社会に貢献したいとホームヘルパーの資格をとりました。私も機会があれば挑戦してみようと考えています。

これからますます高齢化社会になっていきますが、介護保険等の福祉面のさらなる充実と発展を望むと共に、お年寄りや病人が安心して暮らせるような明るい二十一世紀になってくれることを心から願っています。



インタビューに答える今田さん(右)

「娘が出会った優しい医療」

安達 詩子(26)

福島市・主婦



「アノコ、アノコ……」
夜もふけて娘のせきはひどくなる一方でした。布団の中で寝ていらなくなると、起き上がって肩で息をしています。

「志歩ちゃん、大丈夫？」
問いかける私の声に、娘の返事はありません。四歳の娘、志歩は自閉症です。私が大丈夫？と聞いても、話しかけられている言葉の意味がわからないのです。かかりつけの小児科の診療時間はもう過ぎています。自分で自分の状態を説明できない娘に代わり、私は娘の体から出ているであろうサインを読み取ろうと必死でした。

三十分後、私は娘を車に乗せました。夜間診療所に娘を連れて行くためです。車を走らせながら、私は少し不安でした。普段かかっている医師はよく理解して下さっていますが、娘の持つ障害——人とコミュニケーションをとるのが苦手な、相手の言っていることがわからないために好き勝手に行動してしまう——を、また医師に説明しなくてはならない。今日の当番医師が志歩をわかってくださる方でありますように、と祈るような気持ちでした。

夜間診療所に着き、診察室に娘が呼ばれました。自閉症の子供は初めての場所が苦手、とよく言われています。娘は「ホコホとせき込み、落ち着かない様

子で早くも泣きへそをかきそうな顔をしています。娘の手をひいて診察室のいすに座らせた。

机に向かっていた当番医の先生が、くるりと振り返って娘と向かい合わせになりました。

先生はかなり年をとったのんびりとした雰囲気の方でした。娘に向かってみて、「どうしたの？」

娘はさうと先生から視線をそらし、あらゆる方を見ている。返事はありません。

「あの、夜にならたら急にせき込みだして、苦しうで眠れないみたいで……」

先生に悪いような気がして、私はあわてて口をさみしました。

「そっちな」
眼鏡の奥の先生の目は、どこまでものんびりと笑っているように見えました。

「苦しいのかい？」

娘は何も言いません。先生は自分の両ひざに手をあいた格好です。と娘を見ます。先生、あの娘は自閉症なんです。いたたまれなくなると、また私が口をはさみしました。

「そう。先生はそう言ったり、姿勢を変えず娘を見続けています。今まで初めて行った病院の先生は、「自閉症?」と珍しそうに娘を見たり、その逆に失礼ですが、自閉症のことはあまり詳しくないのかな」と感じるような先生だったりしたのですが、この先生は私が思いきって告げ、「しても、表情も姿勢も変えず、ただただ娘の顔を見ているだけです。不思議な先生だな」と思ったその時、お母さん、僕の後ろに立つて志歩ちゃんを見て「あらん」。先生が初めて私に向かって口を開きました。私は言われるままに先生の後ろに立ちました。目の前には娘がいます。手と手と座っています。何が何だかわからないという顔をして

きつと私も同じ顔だったと思います。

「あのね、志歩ちゃん呼吸のために小鼻がじわじわと動いているの、見えるでしょ?。これはだいぶ苦しうことなんだよね」。先生がふり向いて私に言いました。

「この子、なんにも言わないけど、苦しいと思っ

た。先生は聴診器を手にとると、娘に見せてくれました。娘は自分でバジマのすそをまくり上げて胸を出しました。見ていた私は思わず口元がほろんとまいました。自閉の子は、口で言われてもわからないが、道具を見せれば、それで何をやるものなのかという事はわかるのです。それを理解して対応してくれた先生に対して、うれしさでいっぱいになると同時に、今まで何回となく繰り返された光景——モシモシするだけなんだから暴れないで——と叫ぶ先生、その上をいくわめき声で抵抗する娘——が浮かんできて、今、目の前で落ちついて座っている娘を見ながら、わかつてもらえてうれしいな、と心から思いました。志歩は生まれて初めてのせん息の発作を起こしていたのです。先生ののんびりした態度が娘にもうつたのか、とでもリラックスした表情で吸入を受けた娘は、帰りには笑顔で、「せんせい、ババハイ」と言っ

て手を振ったのです。

「こいつ子を育てていくのは大変だろうけど、せつかくあなたのように生まれて来たんだもの、頑張んなさいよ。天使の子なんだからね」
あの時の先生の言葉は、三か月たった今も私の胸を温めてくれています。今度もし会う機会があるのなら、ぜひお礼を言いたいです。

「真実のエール」

寺川 文香(34)

埼玉県富士見市・主婦



私は小学三年の時、当時としては子供らしからぬ十二指腸潰瘍を患ったものの投薬により完治し、その後はそこそこの健康に暮らして来ました。大学を卒業したその年の六月に結婚し、翌年三月に待ち望んだ妊娠を知りました。しかし、ちょうど時を同じくして、まっひんの運命的な病に侵されていることも知りました。

妊娠が分かった一週間後、私は切迫流産をしかけて実家のある松江の産婦人科医院に入院していました。妊娠の喜びから、一気に大きな不安に襲われ、どうか、このおなかの中に宿る小さな小さな命を助けて下さいと、夫と家族と祈る日々でした。幸いにも、切迫流産の危険から脱し無事退院を迎えました。この授かった命と共に、再び妊婦として過せることに心から安くなりました。

しかし、私には、これでどうにか万全な状態だと喜べない気がかりな症状があったのです。排便時に見られる褐色がかった粘液でした。そして、この際その不安をぬぐい去るためにも、きちんと診てもらっておこうとN病院へ出掛けたのです。

診察を終え、私は医師から、そこで初めて耳にする「潰瘍性大腸炎」という病名を告げられました。潰瘍という響きから、ふと遠い昔に思った十二指腸潰瘍を思い浮かべましたが、医師の説明を聞き、た

ちまち私の胸の内に暗い影が忍び寄りて来ました。

「この病気は、原因不明の難病です。ここでは、妊婦でこの病気にかかっている患者の前例がなく、何とも申し上げられないのですが、母体を考えると、赤ちゃんはあきらめた方がいいかもしれません」と。なんてことにならなう。私の鼓動は速まり、途端に涙が込み上げて来ました。頭の中をよぎる、中絶の二文字と、万が一妊娠を継続出来たとし

病気が及ぼす赤ちゃんへの影響はいかなるものなのか？ 私にとつてそれはあまりにもショックで過酷な現実でした。とにかく、詳しい検査をしてから決めましよう、という事になり、検査待ちの数日間を私は実家でもんもんと過ごしました。

主人は仕事のため、一足先に埼玉へ戻ることにになり、私たちはこの時を、離れて乗り越えなければなりませんでした。クリスマスである私たちはある日偶然にも聖書で同じ箇所を開いて読んでおり、私はその御言葉である、神様のなさることは、皆時にかなう美しいより、赤ちゃんの名前を「皆美」にしたいと伝えました。主人も賛成してくれ、その日から、たとえどんな結果になろうとも、まだ見ぬ我が子「皆美」への小さな希望を胸に祈り続けました。いよいよ当日となり、大きな不安と、みんなの祈りを心の支えに検査に臨みました。

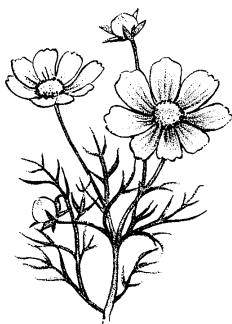
検査が終わって浮かぬ顔をしている私に、この担当だった一人の医師が思ひもよらない言葉を最後にかけてくれたのです。「たとえ片手、片足がなくとも、生まれて来る赤ちゃんは、みんな祝福されているのです。お母さん、頑張ってください」と。その言葉に、私は一瞬耳を疑いましたが、何度か心の中でくり返すうち、これは妊婦に贈る真実の十ルのように思えました。この医師は、私に生きるこの原点を教え

てくれたのです。

検査結果から私の場合まだ病状が初期段階で、それほどひどい状態ではなかったもので、どうにか妊娠は継続していけるであろうという診断が下されました。しかし、リスクも伴ったため最後の決断は、夫婦でと言われ、私たちは、もう迷うことなく、ただこの小さな命「皆美」に会うことに願いを託したのでした。

あれから十年の月日がたち、息子の皆美は元気な四年生になりました。この間に病気の悪化で入院もしましたが、少しずつ自分なりにこの病気とも付き合えるようになりました。

「お前は、生まれる前に危うく二度も命を奪われそうになったのに、今じゃあこんなに大きくなって、生意気言うようになって……」と主人は、時々思い返して息子に話しては、目を細めて息子の成長を喜んでいきます。私にとつて、あの時の医師の言葉はこの先もずっと子育てへの十ルとなって私を支え、励まし続けることでしょう。難病に侵されるといつかは、とてもつらく苦しい事ですが、生きる希望や勇氣も、さまざまな形で与えられるのだと強く心に感じています。



「天疱瘡との闘いの中で」

志村 綾子(54)

千葉県鎌ヶ谷市・会社員



「介護はゆとりを持ってやらた方がいいわよ」と言うお友達の言葉は、ちよつと、義母(以後、母と呼ぶ)が歩くことを拒み始め、最後まで家族だけでみまわつとしていた我が家の介護に、風穴をあけてくれました。

多発性脳(びん)と診断されて、早や四年。徐々に痴ほうが進み、徘徊やオムツをはずしてしまつことから起こる多大な迷惑、お金や物がなくなるとだれかが疑われることへの腹立たしさ等は、家族が病気を理解し、知恵を用いることによつて、乗り越えてくることができました。

世間では、ようやく一般的になりつつあつた、公的介護サービス。最初は、やはり悩みました。母をさし者にするようにな、家庭をのぞかれるような気がして、できれば頼みたくないものでした。しかし、マンネリ化し、家族がゆとりを持ってない介護では、母も苦しいだろう」と話し合い、早速、市役所へデイサービス申し込みに出かけました。

運良く、二か月後くらいから、送迎の車が来てくれました。やさしく、温かく接して下さる職員さん、車イスでの移動、大きなお風呂での入浴…。言葉も出にくくなつてきていた母に刺激が与えられ、口元には笑みが、目には力が出てくるようになりました。職員の方々の言葉かけ、接し方にふれたことは、

私にとつても良い勉強になりました。

一年半後には筋力が衰え、車イスでの送迎が危険となつたためデイサービスから訪問入浴サービスに移管し、またK医院での診療も、通院から往診へと、介護は次の段階へと進んでいきました。

母の楽しみは、入浴、バススタフの中で気持ち良さそうに身をゆだねている母を見て、うれしくなり、施設に預かってもらうのではなく、家でみてあげよう、という気持ちになつたものでした。

このまま穏やかに、時が過ぎてくれることを願つてた矢先の、一九九八年四月に突然発熱。肺炎にならないうつに、あわてふためくと三日。ケロと熱は下がり、食欲も出てきて安心し始めたころ、おなかに水疱が一つ、二つと出てきました。「へ火かな」と言う先生。様子を見ること三日。ある朝、着替えをさせていてびっくりしました。「おはあちゃん、どうなつたの?」という私の大きな声に、家族が飛んできました。母の体には、やけどでもしたのではないかと思われ、大きな水疱が、いたる所にできていました。皮膚科で往診してくださったH先生によると、「天疱瘡」といふ病名で、聞いたことがないよ」といふ病名でした。「治ることはないですよ」といふ先生のお言葉は、「介護のこと、苦しさ、切なさを再び味わわせてやるぞ」といふ地獄からの響きでもありました。

朝、夕、一日一回の水疱つぶし、薬塗り、ガーゼ交換等は、涙なくして出来るものではありませんでした。入院させようか?と悩みながら、苦しい毎日が続きました。

そんな私たちを支えてくださったのは、多くの人たちの温かい愛情でした。それと、勉強、訓練、経験を積んだ医療、介護従事者の取り組みでした。処方

する薬に心を砕き、心構えを教えてください、励ましてくださったK先生とH先生。「清潔が一番だから」と見るまむじこたうしく、触るのも拒みたくなるような母をやさしく抱き、水疱が破けないように、細心の注意でお風呂に入れてくださった入浴サービスの方々。お見舞いに来て、一緒に泣いてくれた友人。すべて、ありがたいものでした。

「こんなにも、母を大切にしてくださいる方たちがいる」と感じられたことは、介護を続ける原動力となりました。皆さんの努力で、水疱は小さくなり、皮膚はきれいになっていきました。

一九九九年一月三日、前日の新年会でみんなに会えた母は、静かに息を引き取りました。

六年余りの歳月は、母にとつても私にとつても、つらく、大変なものでした。この苦勞を通して私は母を、お義母さんではなく、お母さん、と心を込めて呼べるようになりました。笑顔の母が私の心の中で生きています。



「ママの誕生」

布田 美希 (32)

東京都羽村市・主婦



その日、ナースステーションの前を通りかかると、母長さんに呼び止められた。

「今日は、お母様のお誕生日にみなで伺いますので、お昼前には病室にいらして下さい。」

「ありがとうございます。会釈を返しながら病室に足を向け、鉄の重い扉を押し開ける。もうかれこれ、何日たつのだろうか。母の意識は戻らず、今までの疲れをいやすように目を開かない。

「早く今日も来たよ。母の耳元でささやく。」

「意識がなくても、お声は聞こえているんですよ。毎日、何かする時は話しかけてあげてくださいね。お嬢さんの声は、きくとわかるはずですよ。母の担当の看護婦さんに最初に教わったことだ。

私よりずいぶん若いであろう看護婦さんは、白衣の上から「もキティちゃん」のピンクのマークをつけ、胸元に同じ柄のボールペンを差して、なにやら力強く書き込んでいる姿が印象深い。

ホストメイトの暗い雰囲気の中、彼女の持つピンク色は際立ち、ピンクのかたまりみたいな人だなと会ったたびに感じた。

十二月八日昼前、約束通りの時間に母長さんがみなを従えて病室に入ってきた。こんなにも多くのスタッフにお世話になっているのだと改めて感慨深くなるほど列は長く、狭い病室はいきれて暖かく

なるほどだな。

父が前日頼んでおいたという、実家近くの生クリームのおいしいものケーキ。すでにロソクもとまされ、吹き消すのを待つばかりに、ロソクに乗って病室に到着した。主治医の先生の合図で、母への歌のプレゼント。「ムビー・バースデー・久保田さん」。病室に晴れやかな歌声が響きわたる。こんなに多くの人にお祝いしてもらいながら、こんなに悲しい誕生日であるのだなと思い、自然と涙があふれてきた。

「お母さんの代わりにロソクを吹き消してくださいね。元気を出して、一息でね。」

スタッフの励ましと笑顔にささえられ、ケーキに向かったが、涙に邪魔され一息というわけにはいかなかった。病院で育てられたという花束とスタッフ全員が寄せ書きしてくれた「ナースカード」の贈り物が手渡された。

「お父さんからのせうかくのケーキと一緒にいただきますし、ようよ」という母長さんの申し出で、母を囲んで、ケーキと紅茶を前に女同士の座談会が始まった。看護婦さんたちが、久保田さんいただきます」と声をかけてから、お皿に手をのばす。きくと涙をみせた私を気づかせることならたのたのた。

母ばかりか、患者の家族にまでの心配り。会食中も若い看護婦さんたちならでは、明るい話題で場を和ませてくれる。

「クリスマス翌日は残ったケーキが安くなるので、それを買って、三日ケーキだけの食事でも過すんです。一年分のケーキの食べだめ。だから今日はこつてもうれい、なんて、ほほ笑ましい発言も。

母と二人の静寂が戻り、頂いたカードに目を通す。

『最期まで一生懸命お世話させていただきます。』

どうぞ「安心ください」主治医

『私たちと同じ現役の看護婦さんらしいやいなすね。元気な時に、一緒にお仕事してみたらたです。』

数々の温かいメッセージ。母も、数か月前まで同じように患者さんを支えていた。そう思うと、心から誇らしく感じた。

いつもの時間、父が入替わりに病室に。そして、いつも通り午前中の報告をし、母の耳元で、また明日来るからねとささやく。

母は学生時代に私が縫った唯一の浴衣を着せられ、手を胸元に組んで寝かされていた。

ほんの数時間前お祝いの席に集まってくれたスタッフの何人かが、最後の見送りをしてくれた。

「お誕生日のお祝いができてよかったです。この日に旅立たれたのは、すぐに生まれ変わるようにとの神様の配慮ですよ。お体大切に。元気な赤ちゃん産んでください。」

おながが目立ち始めていた私に、ピンクの看護婦さんは恐れない言葉を贈ってくれた。

時がたつほど寂しさがつるとよく人にいわれた。例外なく、私にも訪れた。

数か月後、男所帯になつた実家の食卓に、無造作に置かれた一枚のはがき。

『早いものです。ね、お別れしてから三か月がたちます。今はきつとつらい病状から解放されて、天国から家族を見守っていることと思います。』

S病院 聖ホスチウススタッフ一同
丸い、ピンクの看護婦さんの字が躍っていた。
—— 本当ありがとうございます。——

「お母さん、大丈夫ですよ。」

田淵 泰子(28)

神戸市・主婦



この手記を、感謝を込めて、息子の担当医である〇先生と、育児日記をつけてあげられなかった最愛の息子に送る。

今、息子である訓章は一歳半。元気一杯に走り回る姿を見て、ふと心から笑っている自分自身に気付く。去年の今頃はあらか、息子を出産して以来、目に映るものすべてがフィルター越しに私には見え、季節の移り変わりも心に響かず、ただただ息子の両手を見ては涙を流す毎日。きつこの先、本当に心から笑える日なんてない……と思っていたからだ。結婚して三年目。待望の妊娠、出産、まさに順風満帆の幸せの絶頂だった。と思っただけ、ほんの束の間、分娩台で我が子と感動の対面をし、手を握った瞬間思わず「アッ……」と悲鳴をあげた。赤ちゃんの両手の薬指と小指が、まるで貝のようにくっついてしまっているのだ。一瞬にして至福から絶望の淵へとおいやられた。私にしては、あまりにも衝撃的だったため、その後の記憶がすっかり飛んでしまった。後は、産婦人科医の「ごくごく簡単な説明を受け、事務的な処理として一通の紹介状を手渡され、夫と赤ちゃんと共に産婦人科を退院した。早速、紹介された総合病院の外科(なぜか、外科医への紹介状だった)の診察室で担当医の話を伺う

と三か月後に手の専門医を付けるというような話をし、私自身に喫煙の有無やら妊娠時期の薬物飲用の有無などを事細かく尋ねてきた。もちろん喫煙の経験も無ければ、薬物の誤飲などあるはずもなく、その結果はやはり産婦人科同様、原因不明というものだった。私としては治るものなら今すぐ、何でもかしてあげたい。代わるものなら代わってあげたい。その一念だが、いとも簡単に崩れてしまった。それからというもの、息子の手をさすっては「ムン、ムン、ムン」と繰り返してまた自分の中では自責の念にかられる日々を送っていたのだ。親としては何とかしてあげたい、と三か月も待てるはずもなく、ありとあらゆる情報を駆使して、医者という医者にかたばやしからあたっていき、そんな中で私たち親子は〇先生と出会ったのであった。

先生は初対面の私たちにもかわからず、まるでずっと以前から私たちを知っていたかのように手招きして診察室へと案内してくださり、開口一番「お母さん、今まで良く頑張りましたね。大丈夫ですよ」とおっしゃった。「これはだれが悪いんでもない。神様ががちょうとしたすらをしたんですね」と言い、息子の手をなでながら「お母さん、大丈夫ですよ」とやさしいまなざしで言うてくださったのだ。

次の瞬間、私は胸に熱いものが一気に込み上げ、あふれる涙を抑えることが、どうしても出来なかった。今まで数々の専門医にあたってきたが、決まて返ってくる答えは、妊娠初期による何らかのトラブル、原因は不明。

だが、この先生の口から最初に出たのは、「良く頑張った」と、大丈夫ですよ」という言葉。これこそが、私が一番聞きたかった答えであり、またこの初め、自分が親として、一人の人間として認めてもら

えたという気がした。

聞けば、この先生は以前は外科が専門だったが、この世に生を受け、生まれるべくして生まれた赤ちゃんに何らかの障害をもたせました。その母親の流す涙を見て、形成外科に転身したと、時折先生自身も声を詰まらせながら説明してくださいました。そこで、夫と共にすべてをこの先生にゆだねようと固く心に誓った。

幸いこの一年半で、三度にわたる手術も無事終了し、今は穏やかな毎日を送っている。今や現代医学は日進月歩の歩みで、常に進化し続けているが、私たち患者にしての真の医療とは、その患者の身になって何よりも安心させてくれることだと私は思う。そういった意味で、息子の母親となれた事で実に様々な経験をし、その中で先生と出会えた事、心から感謝している。これから先病める人がいれば、この次は、大丈夫ですよ」と言うてあげられる人間になりたい。私も息子も――。



「看護婦さんの涙」

伊勢 夏美 (30)

鳥根県旭町・主婦



生まれてから手術を八回経験した息子は、三年生、九歳です。入院するたびに、看護婦さんにお世話になっていきます。二歳から五歳ごろまでは採血や消毒をするのも看護婦さんと戦争のようで、本当に大変でした。

それが小学生になると、すっかりお兄ちゃんになり、今まで看護婦さんを困らせていたのが別人のようです。入院の説明で、お母さんの付き添いがないくても大丈夫？、と冷やかされても、大丈夫だよ！一度、一人暮らしをやってみたかったんだと強気の返事に、子供の成長が早いなと感じていました。

入院が三日目を過ぎたころ、廊下で会った看護婦さんが、夜、ベッドの中で泣いていました。と、そっと教えてくれました。

私は息子に何も言わず付き添いの許可をいただき、何日か一緒に過ごすことにしました。体は大きくなっても、まだ九歳です。その夜はとても安心してような寝顔で、ぐっすり寝ていました。看護婦さんの言葉で、子供のプライドを傷つけずに子供の気持ちを知ることができました。

手術の日が近づき、息子にその事を話すと少し面倒そうに「いやだな」との返事。赤ちゃんのころは泣きながら三、四歳のころははいやがるのをなだめながら、そして五、六歳のころはあまり怖さを知らず

寝ているあいだに、という観念があったからだと思います。

九歳になった息子は少しちがっていました。頸部の腫瘍の病気の再発、再発でもう八回目。今では頸動脈、鎖骨、神経、声帯といろいろな所に障害を残す難しい手術だと理解できるようになり、怖かったのだと思います。何も言わなかつたので、私は今回も頑張ってくれるものと思っていました。

手術の朝、息子の目は少し涙ぐんでいました。私にあまり顔を見せてくれないのです。手術室まで歩いている息子の肩が震えているのがはつきりわかりました。

手術が怖いと感じ、泣くのが恥ずかしいという年ごろになつて、自分なりにそれを一生懸命こらえていました。母親である私には手術の経験が一度もありませんが、息子の恐怖心を、どれだけわかつてあげられていたでしょうか。

今までは不安がらせばいいけなく、息子が手術室に入るまでは涙を見せず励ましていました。

手術室の前まで来た時、息子は我慢も限界に達し、声を出して泣き出しました。私を見つめ泣いているのに、励ます言葉が出ず、それどころか私も一緒に泣いてしまいました。息子を抱きしめ、「ごめんね。必ず治る。ごめんね……」と心の中で言うてあげただけでした。私は泣きながら手術室へ入る息子を見送ることになってしまいました。付き添って下さった看護婦さんと病室にもつても、私は涙が止まりませんでした。看護婦さんが、小さい子供さんが涙をこらえて頑張る姿を見るのはとてもつらいです……と、一緒に泣いていました。

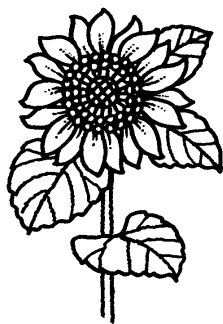
今まで励ましてくれた看護婦さんはたくさんいましたが泣いている看護婦さんを見たのは初めてで

した。なんだか強く励まされるより、私は一緒になつて泣いてくれたことが、とてもうれしく感じられました。きつと息子も笑顔の私を見て、平気であるお母さんより、自分が一番つらい時に一緒に泣いたお母さんでよかったのかも……。看護婦さんの涙がなければ、私は息子の前で泣いたことをいつまでも後悔していたと思います。この時子供と一緒に気持ちになつてあげる大切さを知ることができました。

息子に、「お母さん泣いてたね、僕、頑張つたからもう大丈夫だよ」と私が励まされたみたいで、数日後、私は、「まあ君がつらい時は、お母さんもつらかった」と笑顔で答えました。

患者にとつても、患者の家族にとつても、看護婦さんの存在はとても大きいものがあります。仕事の内容が大変な上に、精神的にも支えて下さつた看護婦さんに感謝の気持ちでいっぱいです。

看護婦さん、あたたかい涙をありがとう！



「祖母の死で思ったこと」

長谷川美津子(30)

下関市・主婦



それはあまりにもあつけない死だった。前日まで元気だった祖母が、突然おなかの痛みに苦しむ病院に運ばれたのは、平成十一年の秋の事だ。病院で祖母の口から最後に出たのは、私のおなかに宿る新しい命を気づかう言葉だった。優しくおなかをなでてくれたその手のぬくもりを、まだ覚えてる。そのわずか数時間後、病院からの電話で駆けつけた私たちに、祖母はもう何も答えてはくれなかった。息をしないでない祖母。目の前で、心電図の数字はゼロになった。担当の先生が腕時計を見て、「零時五分です」と小さく告げた。ドラマのようだと私は思った。しかし、ドラマのように泣き叫ぶことはなかった。突然のことに、驚き、ぼう然とし、何だか訳が分からないというのが正直な気持ちだった。

慌ただしく通夜、葬儀と準備が整う。人々が出入りし、忙しい数日が過ぎていく。その中で私はある人の言葉を聞いた。もし、おばあちゃんがもっと大きな病院に運ばれていたら、助かったかもしれないね。私は答えた。「でもおばあちゃんが望んだことなんです。いつも行っている病院で、大好きな先生に診てもらおう事を望んだんです」。

祖母が運ばれたのは、いわゆる大病院ではなかった。地元のお年寄りがよく集まるようなところだった。もちろん信用のおける病院で、私も風邪をひい

た時などよくお世話になっている。祖母は診療はもちろんのこと、週一回デイケアに行っていた。いつも木曜日になると元気に出掛け、帰ってから楽しそうにその日の出来事を私に話してくれた。季節の行事があり、歌を歌ったり、踊りを踊ったり、おしゃべりしたり……。足が不自由な祖母は外出する事はなく、だから週一回のデイケアをとっても楽しみにしていた。お世話になった先生や看護婦さんのことについても信頼し、大好きだと言っていた。だから、その病院に運んでもらう事を望んだ。

祖母が倒れて運ばれた時、先生が病状を説明して下さった。「大きな病院に運び、おなかを開いて検査をしなければ、原因がわからないのです。でも、本人は嫌がっています」と。大きな病院には機器もそろい、医療の体制も整っているだろう。しかし、おそらく祖母にはおなかを開くという手術に耐える体力はない。それは本人が一番よく分かっていて、メスを入れた時点で祖母の体力は限界に達し、命を落とす危険性がかなりあった。助かったとしても寝たきりになるかも……。一緒にいた母は先生の話聞き答えた。「そうですね。本人が嫌がるのなら……」。つまり死を待つ以外に方法はないのだ……。たれも言わなかったが、これが事実なのだと思いついた。

そして、死は思ったよりも早く訪れた。後日、あいさつに行った病院で先生はとても悔しそうだった。「あの時に大きな病院に運んでいれば助かったのかも……」。でもそれは、祖母の望んだことではないのだ。

私は、祖母はとても幸せな死を迎えたのだと思つた。いつもお世話になっている先生や看護婦さんに囲まれていた。みんなが祖母の死を悲しんでくれた。それで十分なのだ。時計で死亡時間を確認した時の

先生の顔。祖母にけられたテープを外しながら、「頑張ったね」と話しかけてくれた婦長さんの声。目を押さえていた看護婦さんの姿。それらすべてが、祖母にとって幸せな最期の瞬間だった。少なくとも大病院で知らない人に囲まれながら迎える死とは全く違う。これで良かったんだ。

葬式のあと、祖母の部屋からカードが出てきた。「お誕生日おめでとうございます」と書かれたカードは、いつも祖母がお世話になっていた。そして祖母の最期をみつけた先生から贈られたものだった。何枚ものカードは大切にしまわれていた。それを見た時、ああ、本当に祖母は幸せだったんだ、と改めて思った。

祖母の死をきっかけに、私は医療について時々考えるようになった。大きな病院で様々な検査をし、命を延ばすのも医療だろう。しかし、馴染みの病院でいつも先生にみとられる。死も医療なのだ。祖母の顔がそれを語っていた。きれいに化粧をし、家に帰って来た祖母の顔はほほ笑んでいるようだった。思わず私もほほ笑んでしまうような顔だった。安心して死を迎えた祖母の顔を見て、すべてを納得した。

「先生、婦長さん、看護婦さん、病院のすべてのスタッフの皆さん、お世話になりました。ありがとうございます。心からそう言いたい。祖母の死は悲しい出来事だったが、この病院を選択した事は決して間違っていないかたのたと思つた。」

私は、祖母はとても幸せな死を迎えたのだと思つた。いつもお世話になっている先生や看護婦さんに囲まれていた。みんなが祖母の死を悲しんでくれた。それで十分なのだ。時計で死亡時間を確認した時の

「青い空に近づけた心の訪問看護」

森田 欣也(36)

愛媛県松山市・無職



今、訪問看護に来てくれています。血圧、体温異常なし、脈拍もOK……。

十八年間、ちよつとしたことが原因で、第三頸椎脱きゆう骨折するという事故に遭いました。いろんな病院を転々としながら、七年という長い歳月の機能回復訓練という名の入院生活を経て、右手のく一部を除く全身マヒと、体中何もわからない感覚などの障害を残し、全介助のまま十一年前より自宅で生活を始めました。病院の窓から見ていたところまで、でも続く青い空に一步でも近づきたく。

夕方のコースを見てから食べるのでできる夕食。いつまでも続く深夜放送。一、二曲も歌うことのできなかった入浴時間も、たふぶりと三曲は歌うことのできるほどになるなどの、半年を過ぎるころには一日百時間にも感じるようになりました。

こんなあり余るほどの時を、なんの勇氣も持ていない私がほとんどひとりで過ごすようになって、なんで私だけがこんな目に遭わなければいけないのか、どうしてこんな思いをしなければいけないのか、残った数少ない機能のうちのひとつの脳みそが、つらい、悲しいという感情をぐる回転しはじめ体が重たくなつてきました。

現実から逃げたくて、スパマンになったり、透明人間になつたり、スポーツのヒーローになつたり、ま

た、ブラックジャックのようなマンガの中の名医が突然現われてこの体を治してくれるとか、若い美人看護婦と恋に落ちるなどの空想の世界に住むようになり、自ら青くて広い空を遠ざけてしまっていました。

そんな重さに背中が丸くなって三年たったころ、脳みそ以外はいたって健康だが体がいうことをきかない私のところに、家の近くの小さな病院から訪問看護に来てくれるようになりました。ひまとしてラックジャックと美人看護婦さんと思つたけれど、普通の若い医師と、ベテランの普通の看護婦さんでした。

きこえない笑顔であいさつを交わし、血圧、体温、脈拍を測り、たわいのない話をするだけで一回目が終わりまりました。二回目、三回目、四回目、次も次もその次も、特別な薬を飲むわけでもスハシル注射をするわけでもない。ただその繰り返しだけでした。でもなんだろう。なぜなんだろう。たわいもない話をして、私のまらなくちを、いつもふたりはすてきな笑顔で聞いてくれていただけに、少しずつ体が軽くなつていくような気がしました。

ある日、いつもとちがう体格の良い医師が来てくれた時でした。歳も近く、学生の時私と同じラグビーをしていたとかで、たわいもない話はいつも以上に盛り上がりました。そんな時、ふと、ラグビーでも観に行きたいなと、ポロとこぼしてしまいました。すると、そうだね、いつか行けたらいいなという言葉ではなく、じゃ今度みんなで行こうかという意外な言葉が返ってきました。

「えへへ……」
「だいたいぶだから」
「でも外に出るなんて勇氣もないしそれに……」
「だいたいぶはくが付いて行くから」

「でもそれ……」

「職業を聞かれたら確かに医者と答えるけれど、その前にひとりの人間なんだから、ボランティアとしていや友達として……」と、私の動かなくて冷たい手を握ってくれました。熱いも冷たいのもまたくわからない、感覚がマヒしてしまつた手なのに、なぜかあたたかいものを感じました。それは手で感じたものではなく、心で感じたものでした。私にはまだ心が残っていたことに気がきました。

「だいたいぶだから」
「……うん」

力強くて大きな言葉が、丸くなってしまつていた私の背中をやさしく押してくれました。ベテランの看護婦さんが、いい笑顔しているよ。とすてきな笑顔で言ってくれました。

どこまでも続く青い空に一步近づけたようでした。

それから、少しずつ近づいています。俳句をはじめいろんな趣味ができました。外へ出て、たくさんの人と出会いました。二十四時間では足りない毎日を送るようになりました。

そして、血圧、体温異常なし、脈拍もOK。
「それでね、俳句つくつたけど聞いてくれる」
「また巨人負けたね」
「それでね……。明日はね……」
心の訪問看護に今日も来てくれています。

「なかなかかわいい赤ちゃんじゃ」

和田嘉海 (53)

高知市・主婦



その瞬間、麻酔の効いているはずの下半身に、やわらかく跳ねた感じがあったかと思うと、緊迫した空気を破るように元気な産声が響きました。
私はたまたま胸がしびれました。
昭和五十一年七月二十一日午後五時三十一分のことです。

私の子宮には奇形があり、通常の半分の大きさもないのです。
そのため、二十七歳の時に妊娠五か月でおなかの赤ちゃんが死んでしまいました。

かかりつけの産院で人工陣痛により赤ちゃんを取り出す手術中、突然大出血し、千二百CCの輸血と引き換えに命を取り留めました。

二年後に再び妊娠した私は先生をたずね、どうしても産みたいと懇願しました。

大変な思いをさせた患者だから、よそに行ってくれと拒まれても仕方がないと覚悟していたのですが、うなぎながら聞いていた先生は私をじつと見て、「がんばりましょう」と力強く言ってくれました。

安心したのも束の間、三日後には早くも流産の徴候に見舞われました。慌てて入院した私は出産まで病院で過ごすことになりました。

流産のおそれが消えツワリを越え、腹帯を巻いた直後

から陣痛に似た痛みに襲われるようになりました。赤ちゃんの成長と共に子宮の張りが強く痛みます。

昼も夜も間断なく続く痛みに不安が重なり、私は思わず、「もうイヤです」と言っていました。

すると先生は「いじりなく敵しい声で、赤ちゃんもがんばっているのだから、あなたもがんばりなさい!」と強くかかりました。

私は心と我にかえり、痛みを耐え抜く決意をしました。

入浴も禁じられ、絶対安静の毎日を送る私を、五人の看護婦さんや一人の学生さんそれぞれお掃除のおはさんや会計の人までやさしくいたわってくれました。大きな支えでした。

何よりの安心は、先生が病院の一角に住んでいて何かあれば夜中でもすぐに駆け付けてくれることでした。

雨の日には廊下のあちこちにハゲツが置かれる古い木造の病院でしたが、病院全体があたたかいファミリーのようでした。

私は、大部屋に長くいるうちに不思議なことに気がきました。

先生は流産しかけている人、きついツワリに苦しむ人、陣痛がおつている人には詳しく状態を聞き、丁寧に指示を与えて励ますのに、無事に出産を終えた人には意外とそんなに優しいです。特にかたわらの小さなベッドに眠っている赤ちゃんにはチラツと視線を走らせ、「なかなかかわいい赤ちゃんじゃ」と早口で言うだけです。

決まり切ったセリふをなぞるように、どの赤ちゃんにも全く同じ繰り返してました。

私はもう少し別の言い方もあるだろうに、と不思議に思っていました。ある時、スッと霧が晴れるようにわかつたのです。先生は、無事に生まれた命より、これから困難に打ち勝つて生まれようとする命がより大事なのだと

いつとが。

そのことがわかった時、私は大きな感動と共に強くフアイトがわきました。

安全を以て予定日より二週間早く帝王切開手術をし、女の子を産みました。先生は万一切に備えて大事な会合も欠席し、一晩中待機してくれていた。と後で看護婦さんに教えてもらいました。朝夕の回診時先生は娘にも、「なかなかかわいい赤ちゃんじゃ」と言ってくれました。私にとつて最大の祝福でした。

退院の朝、娘を抱き、診察の合間を縫ってお礼のあいさつをしました。先生は娘を素早く見て、「なかなかかわいい赤ちゃんじゃ」ともう一度言ってくれました。その手はずでに次の患者さんの力止をまさぐっていました。

娘が二歳の時、事情があつて娘の父親と別れましたが娘は明るく育ってくれました。

八年前に両親が相次いで世界したため、入院中の祖母の面倒を四年間みました。

私と一緒に病院に行くたびに看護婦さんをしつと見ていた娘は、看護学校に進学して正看の資格を得ました。合格通知が届いた日、私は娘に母子手帳を渡しはじめて話しました。

黙って聞いていた娘の目から大粒の涙がこぼれた時、耳の奥に先生の声がよみがえりました。

「なかなかかわいい赤ちゃんじゃ」
娘は病棟で血液がんの患者さんのお世話をしています。娘を取り上げて下さった先生は七十歳を超えましたが、ますますお元気で新装した病院で診察しています。

「二十一世紀に課題とされる医療とは……」 あるがん患者との交流を通して

次郎丸 洋子(36)
福岡県福岡市・主婦



「涼しい風が気持ち良かった……。ありがと……。そう彼女は言った。そして三日後に永遠の人となった。」

今から約十年ぐら以前の話です。私は、一人のあるがん患者との交流を決して忘れることはできません。その人は、六十八歳のすい臓がん末期の方でした。その人との出会いは、私が看護婦になって四年目の春、外科病棟に移った時の事でした。

内科勤務の長かった私にとって、手術をたくさん付けた外科の患者さんたちは、新人看護婦になった時と同じような驚きでした。

毎日、毎日の忙しい勤務の中で、まだ十分に業務に慣れない私は、一日の仕事の疲れを次の日に引きずるような、精神的にも肉体的にもきつい毎日を過ごしていた。

そんな時、私は点滴やチューブばかりを管理している自分に気が付いたのです。「患者さんの顔をしっかりと見なくちゃ……。そんな事を思っていた時の準夜勤務の検温の時でした。」

「あなた新しい方ね……。そう言いゆくに横たわる一人の老婦人がいました。小さなおばあさんという言葉がびつたり、白髪で目元の涼しい印象の患者さんでした。手術が終わったばかりだったので、痛みはいかです

か」と月並みな言葉をかけて笑顔を返した時、あたたか笑顔を返す。心が安らぐわ……。と、思われぬ言葉をかけられた。それは、気を張りつめていた私の心を解きほぐしてくれる、一言でした。

大手術をした後に、他人の事に心や目を傾けられる、そんな人がいるなんて驚きでした。

それからその人の病状や経過などがとても気になるようになりまして。しかし、一か月が過ぎてても彼女の状態は良くなるどころか、すい臓のチューブ以外にも排泄物を外に出す他のチューブが新たに付けられる状態でした。

既に入院から四か月以上経過し、季節も冬から春へと変わってしまいました。彼女は、ICUと同じく窓がなく、風も思うように入らず、看護婦の目だけが集中する部屋へと移されていきました。

ある時、病院に行く途中の道端に菜の花が咲いていたので、彼女の枕元に置きました。

「太陽のにおいね。外に行ってみたいね。風に当たりたいわね」とほろりと言いました。

彼女の言った一言が、私の心に深く突き刺さりました。こんなチューブばかりにつながれて、もう外の風景も見えず、風も感じずに最後を迎えるのがはたして彼女が望んでいることなのだろうか。少しでも人間らしい思いをさせてあげられないのだろうか。彼女が一番したいことをさせてあげたいと強く思うようになりまして。

しかし、カンファレンスに取り上げても、病状の看護管理の話し合いばかりで、外に行きたいという彼女の希望についての話し合いは、一向に進む事はなかったのです。

私は、直接担当医に相談し、願いを伝えました。担当医は、彼女の死期が近いと感じてか、すべてのチュー

ブを持って、寝たままの状態という条件で首を縦に振って下さり、彼女の願いがかなう日が来ました。一歩ずつ外に近づくにつれ、彼女は重心のようにはしゃいでいました。

「空が見える……。やっぱり外の風はいわね」と静かにつぶやきました。ほおに心地よい風が優しく触れるのが、わかったようでした。その日、病室に戻った彼女のほおはほんのり紅潮していて、幸せそうな眠りに入っていました。

数日後、入院中のお礼のあいさつにとご家族が見え、彼女がとても喜んでいた事を私に伝えて下さいました。そして続けて息子さんが、あのままゆに横たわつていてもきつと母には三日後に死が訪れたでしょう。本当にありがとございましたと……。

私のせいで病状が変化したのでは……。と責任を感じていたので、ご家族の言葉に救われる思いでした。

私は、彼女の望みを一つかなえたなんて思っていないけれど、彼女に一瞬でも心地良いと思える瞬間があったとしたら、また、生まれて来て良かったと感じて死んでいけたとしたら、そこには心地良い一瞬の空間が存在したのではないかと思います。病床の彼女に私は、看護の本質と、人間らしさとは何かを問いかけられたように思います。

現代の医療は、日進月歩であり、あらゆる新技術でたくさんの方の命を救っていると思います。

しかし、その中に人間らしい最後を迎えたいと思っている人達もたくさんいるはずです。

二十一世紀には、最新式の技術や薬を使って命を救う事は更に進んでいく事でしょう。二十一世紀には、人間らしさを救う医療も必要ではないでしょうか。

表彰式の模様



2000年2月26日(土)大阪府版



2000年2月26日(土)奈良県版



2000年2月26日(土)兵庫県版



2000年2月26日(土)社会面



2000年2月26日(土)北海道版

入賞者発表



2000年2月16日(水)兵庫県版



2000年2月16日(水)全国第二社会面



2000年2月16日(水)北海道版



2000年2月16日(水)奈良県版



2000年2月16日(水)大阪府版



2000年2月16日(水)島根県版



2000年2月16日(水)埼玉県版



2000年2月16日(水)福島県版



2000年2月16日(水)愛媛県版



2000年2月16日(水)兵庫県版



2000年2月16日(水)山口県版



2000年2月16日(水)多摩版



2000年2月16日(水)高知県版



2000年2月16日(水)千葉県版



2000年2月16日(水)福岡県版

コンクールの経過

第18回「心に残る医療」

私の体験記コンクール経過報告

日本医師会常任理事 山田 統正



経過をご報告申し上げます。「心に残る医療」私の体験記コンクールは、昨年の九月中旬に読売新聞に社告をもって募集を開始いたしました。十二月二十日に締め切りました。その結果、前回を上回り、今回は二、二八七編という多数の応募がございました。

そのうち、介護をテーマとしたものが四〇四編、海外応募作品が二二編と年々、その数を増し、主催者としても喜ばしいことです。

審査は、第一次審査を本年一月十一日から十四日まで読売新聞本社で、従来と同様に元読売ブッククラブのリーダー等の方々により行いまして、その中から一五一編が選考されました。

続きまして、第二次審査を一月十五、十六の両日にわたり、台場のホテルグランパシフィックメリアンで、日本医師会の広報委員九名によって、ここからさらに二九編が選ばれました。

最終審査は二月二日、読売新聞本社におきまして、審査委員として、日本精神病院協会名誉会長の齋藤茂太先生、医事評論家の水野肇先生、評論家の上坂冬子先生、厚生省健康政策局長の伊藤雅治様、アメリカンファミリー生命保険会社会長の太竹美喜様、読売新聞社事業局長の矢後勝洋様、それに私に加わりまして、以上の七名で慎重に審議させていただきました。その結果、ご案内のように、厚生大臣賞、日本医師会賞、読売新聞社賞、アメリカンファミリー賞、介護特別賞、並びに佳作十点が決定し、二月十六日付の読売新聞の紙上に発表されました。

ここに、発表になりました次第をご報告申し上げますとともに、受賞の皆様によりお祝いを申し上げます。ご投稿下さいました二千数百の読者の皆様、なおかつ、このコンクールにつきましてご支援賜りました多数の方々へ感謝を申し上げます。経過報告といたします。ありがとうございます。

コンクール経過

平成11年

9月16日

募集開始

12月20日

(読売新聞全国第二社会面社告掲載)

平成12年

募集締め切り

1月11日、14日

第1次審査(於・読売新聞社)

1月15日、16日

第2次審査

2月2日

(於・ホテルグランパシフィックメリアン)

2月16日

最終審査(於・読売新聞社)

2月25日

入賞者発表

(読売新聞全国第二社会面社告、各都道府県版掲載)

表彰式、記念パーティー

(於・帝国ホテル)

審査委員一覧

最終審査委員

日本精神病院協会名誉会長
 医事評論家
 評論家
 厚生省健康政策局長
 日本医師会常任理事
 アメリカンファミリー生命保険会社取締役会長
 読売新聞社事業局長

齋藤 茂太
 水野 肇
 上坂 冬子
 伊藤 雅治
 山田 統正
 大竹 美喜
 矢後 勝洋

審査委員名簿

第一次審査委員（順不同）

遠藤 康次 針谷 文子 巖谷 令子
 渋江 芳夫 佐山 和歌子 中田 陽子
 星野 勢津子 小村 平安子 菅原 明子
 山口 菊江 船木 誠 菅原 和子
 鈴木 貫一 荒井 文也 深澤 美佳
 斉藤 与里子 金子 久子 貞末 彩子
 針谷 喜八郎 福田 ツヤ子 西山 翠

第二次審査委員（順不同）

西 信博 榎殿 敦
 矢島 暎夫 八田 喜弘
 遠藤 幸男 伊藤 新次朗
 伊藤 巖 隈部 時雄
 徳永 五輪雄

作品募集の主な応募規定

医療従事者との心温まる触れ合いや介護にまつわる様々な体験など、患者や家族の心に刻まれた感動的な体験記を募集します。

四百字詰め原稿用紙五枚（二千字）以内。ワープロ可。

未発表作品に限ります。

作品に表紙をつけ、題名、住所、氏名、年齢、性別、職業、電話番号（FaxがあればFax番号も）を明記。介護部門には「介護部門」と付記。

医師とその家族は応募できませんが、その他の制限はありません。

版權は主催者に帰属し、応募作品は返却しません。

上位五賞（厚生大臣賞、日本医師会賞、読売新聞社賞、アメリカンファミリー賞、介護特別賞）各一点（賞状、表彰楯および賞金五十万円）、佳作十一点（同十万円）を選び、表彰します。

平成十二年度の詳しい募集要項は、九月ごろ読売新聞に掲載する予定です。みなさまの貴重な体験記をお待ちしております。

第18回「心に残る医療」私の体験記コンクール応募数

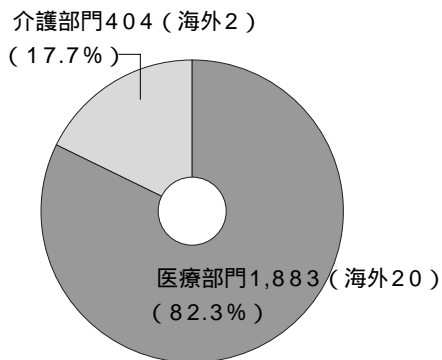
応募数内訳

都道府県別

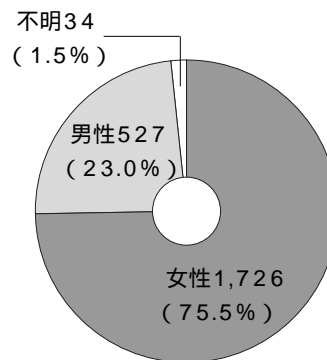
都道府県	応募数	都道府県	応募数	都道府県	応募数	都道府県	応募数	
北海道	54	東京	329	滋賀	20	香川	11	
青森	25	神奈川	201	京都	42	愛媛	24	
岩手	20	山梨	12	大阪	182	高知	11	
宮城	24	長野	32	兵庫	102	福岡	84	
秋田	16	新潟	18	奈良	28	佐賀	6	
山形	16	富山	19	和歌山	12	長崎	25	
福島	25	石川	16	鳥取	15	熊本	21	
茨城	78	福井	12	島根	12	大分	20	
栃木	79	岐阜	32	岡山	24	宮崎	19	
群馬	47	静岡	46	広島	24	鹿児島	16	
埼玉	181	愛知	74	山口	22	沖縄	1	
千葉	156	三重	27	徳島	5	海外	22	
							合計	2,287

応募作品

部門別応募数 ()内は海外



男女別応募数



年齢別応募数

20歳未満	105	60～69歳	282
20～29歳	295	70～79歳	188
30～39歳	559	80歳以上	24
40～49歳	393	不明	82
50～59歳	359	合計	2,287

読売新聞ではみなさまからの心温まる医療体験や、
貴重な介護体験を募集しています。

第18回「心に残る医療」
私の体験記コンクール 入選作品集

2000年4月発行

編集 読売新聞社事業局 事業開発部

発行所 読売新聞社

本社 〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1

事業開発部 〒135-8438 東京都江東区清澄1-2-1

電話 03(5245)7093

FAX 03(5245)7690

印刷 光村印刷(株)